

## 校 園 名：福井大学教育学部附属小学校

所在地：〒910-0015 福井県福井市二の宮 4-45-1 電話番号：(0776)22-6891

記載日：2016年5月20日

記載者：柴守俊彦

記載者役職：副校長

### 貴校の校風、おおまかな特色について

本校は、「夢をもち、未来を拓く子の育成—自主・協働・探求—」を教育目標に掲げ、

○つながりを大切にして、高め合う子

○心も体もたくましい子

の育成を目指している。主な取組として、以下のものがある。

- ① 学団活動・集会活動・学校行事等の取組の中で、自主・自立的な校風づくりと思いやりの心をもった児童の育成に取り組んでいる。
- ② 学団を中心に、児童の学び、さらには教師と児童とが学び合える集団づくりに努めている。
- ③ 児童一人一人の個性を尊重し、可能な範囲で教科担任制を積極的に取り入れ、多くの目で学びの過程を見取る取組を進めている。
- ④ 大学の学部や教職大学院の教員と協働で実践研究を進め、附属学校園間で連携し、全国の附属学校の研究を学びながら、学力向上に努めている。毎年、11～12月には、教育研究集会として、県内外多数の御参観を得て、学びの姿・研究の成果を発信している。

### 貴校の卒業生の活躍状況について

- ① 卒業生は、ほぼ全員が福井大学教育学部附属中学校へ進学しており、研究集会や公開授業等で活躍の様子が見られる。どの児童も、附属小学校での自主的・探求的な学びを生かし、プレゼンなど発信する場面で秀でた力を発揮している。
- ② 中学校卒業後については同窓会に入会しているが、小学校として活躍状況を把握していない。

### 貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況

- ① 追跡調査は行っていない。
- ② 本校転出後は、県教育委員会等の行政機関で教育行政担当者や指導主事として勤務したり、転出先学校で研究主任として教育活動の中核として活躍したりしている教員が大半である。また、管理職として、地域の学校運営に取り組んでいる教員も男女を問わず多数いる。

## 魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開的できそうな先導的な取り組みについて

県内の唯一の附属小学校として、常に公立学校へ還元できる教育活動の実践研究を目指し取り組んでいる。本校の魅力を語るとするならば、次の4点に集約することができる。

- ① キャリア十分の充実した教員スタッフが切磋琢磨し、洗練された授業を展開している。年1回の教育研究集会のみならず、常に授業を開き、県内外の教育関係者に公開している。
- ② 継続実施されてきた学団活動などの行事が挙げられる。低・中・高とそれぞれの活動に一貫性をもたせ、より学齢に応じてレベルアップした活動を展開していくことで、さらなる内容の充実を図っている。
- ③ 大学・教職大学院、幼・中・特別支援学校、育友会（PTA）、他機関と連携し、特色ある取組を展開している。特に、開設9年目を迎えた教職大学院とは、協働体制で実践的な研究に取り組んでいる。
- ④ 教育環境の充実にか力を入れている。特に、学習環境の整備と教育機器の充実により、教育効果が増している。

### 【事例1】 深化する研究と積極的な授業公開

毎年秋に開催する教育研究集会には、多数の県内外の教育関係者に参加していただき、授業公開と研究協議を実践している。協働的な学びをベースに、平成26年度からは、「聴き合い、つながり合って、学びを深める授業をつくる」を研究主題に取り組んでいる。また、平成27年6月、WALS（世界授業研究学会）による授業研究研修が行われた。当日は、シンガポールからの視察団が6年生の算数の授業を参観し、授業後の研究会で意見交換を行った。6年児童が様々な方法で円の求積を探究していく姿に、研究会では、「彼らの活動を通じた学びは深く刻み込まれ、彼らはきっと一生涯、円の面積の求め方を忘れないでしょう。」と絶賛された。視察団と本校職員が互いに本時の数学的な価値にまで言及し、言葉の壁を越えた深い交流ができた。



### 【事例2】 児童の自主性・実行力を養成する学団活動

異学年のつながりを大切にし、思いやりの心や助け合う心を育てるため、日々の学校内での活動や野外でのダイナミックな活動を実践している。特に、グループによる探究活動は、公園（低学団）→福井市内（中学団春）→大野市内（中学団秋）→金沢市内（5年セカンドスクール）→京都市内（6年修学旅行）と、段階的にエリアと探究方法のレベルを高度化し、系統的な取組を実施している。仲間や集団づくりを目的とする活動も、各学団の上級生がリードし、下級生が次年度へ継承するプロセスが確立している。



### 【事例3】大学・教職大学院との連携

現在、学部、大学院、附属学校との三位一体の改革に取り組み、平成 27 年度、4 校の附属学校と教職大学院が融合した「附属学園」を設置し、次のような連携を通して、機能の強化に取り組んでいる。また、平成 29 年 4 月には、小中一貫の義務教育学校の開設を予定している。

(1) 附属学校の使命が「教育実習校」から「教員研修学校」への転換期であると捉え、学校ボランティア、教育実習、教職大学院生の年間インターンシップの受け入れ、現職教員の教職大学院派遣など、単なる教育実習だけでなく、教師のライフステージに応じた研修を実施している。学んだ理論を、学校現場で実践し、さらに省察を通して深化を図る教師教育を推進している。

具体的には、以下の通りである。

- ① 教職大学院ストレートマスターコースの院生をインターンとして受け入れ、実地研修を行っている。
  - ② 附属小教員が教職大学院教員を併任し、院生を指導している。また、教職大学院と学校との連携のパイプ役を果たしている。
  - ③ 教職大学院スクールリーダーコースに毎年教員を派遣している。加えて、本年度は学校改革マネジメントコースにも派遣している。
  - ④ 附属小校舎に、教職大学院を併設し、実践と研究の一体化を図っている。
- (2) 「研究実践校」として、地域における先進的な教育実践と研究を進めるため、教職大学院と連携を深め、協働体制で取り組んでいる。

- ① 附属小の研究に教職大学院教員が積極的に関わり、協働で実践研究を実施している。年間を通して、授業研究や全体研究会、バズセッションなどに参加し、授業づくりや検証などを本校職員と協働し、継続的な研修を実施している。
- ② 毎年秋に実施している教育研究集会の指導・助言者として教職大学教員が協力している。教職経験者だけでなく、多様な分野で活躍している教職大学院の教員の視点は、本校の研究に拡がりや深化を与えている。
- ③ 毎年6月、2月に開催される「ラウンドテーブル」では、院生以外の本校教員も積極的に参加し、ポスター発表やグループ発表を行っている。また、児童も継続的な学びで得た成果をポスターセッションで発表している。

### 【事例4】育友会（PTA）との連携

学校と育友会は、「子供の幸せと円満な成長を図る」という目的を共有し、達成するため、連携を密にし、事業を実施している。また、広範な区域から通学するため、地域社会との結びつきが少ない本校のために、学校と地域をつなぐ役割も果たしている。

特に、子供たちの安全を守る活動、教育環境の整備につながる活動、会員の研修や教養を高める活動に重点的に取り組んでいる。具体的な活動例として、

- ・全ての保護者が分担し児童の安全確保と下校指導を行う「下校パトロール」

- ・年1回会員の交流を主目的とし収益を兼ねた「バザー」
  - ・学校の教育活動に参加し共に考える「学校保健委員会や給食試食会への参加」
  - ・年2回の広報紙「ゆきわ発行」
  - ・学年で取り組む「学年支援活動」
  - ・「校舎大掃除」「教育研究集会の支援」など、多様な活動に積極的に取り組んでいる。
- どの活動も学校との連携を密に行うため、育友会担当教諭、教頭が学校の窓口として連絡調整にあたっている。また、月1回開催される「執行委員会」には、管理職、教務主任が出席し、活動の計画や報告について会員と共に協議している。

### 【事例5】充実した教育環境の整備

各学年の教室にはオープンスペースが隣接しており、多様な学びや遊びの空間として利用している。教室の壁は、木材の板を利用しており、温かさや柔らかさを感じられる。教室間の仕切りは可動式となっており、学習内容に合わせた空間作りが可能となっている。また、ICT 機器に代表されるような教育機器も充実している。各教室に電子黒板が常設され、タブレットも複数学級で同時に使用できる台数が確保されている。



### 地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか

勤務する教員も多くは公立学校との交流人事であり、教育研究活動に意欲的な人材が集まっている。一定期間、本校において研究実践を積んだ教員は、教育行政や転任先の学校において中核的や役割を担っている。現在も、本校職員が、他校や市町教委からの依頼により出前授業や研究会講師を務めたり、県内の若手教員や講師・学生を対象の研修会を本校で継続的に開催したりするなど、積極的に地域への貢献に取り組んでいる。

研究内容においても、従前より、探究的な学習や異学年交流をベースとした学団活動に継続的に取り組んでおり、アクティブ・ラーニングが求められる今、本校の取組が公立学校の先進事例となっている。また、そのため、公開授業や研究集会に県内参加者が増加しており、熱心な研究協議が行われている。

また、教育実習校として、県内小学校教員の多数が学んでおり、教職大学院の拠点校として院生のインターンシップを受け入れるなど、本県の教員(教員志望者)の資質向上に大きく寄与している。

### 附属学校の存在意義、貴校の存在意義について

現代社会において教育の果たす役割は非常に大きく、教員の資質向上は不可欠である。特に、教員養成における実践的な研修や現職教員のスキルアップが必要であり、その中核的役割を担う教員養成大学と教職大学院の存在意義は大きい。しかし、研究を進めるうえで、理論と実践が一体化してこそ大きな成果が得られる。その意味で、現在、本校と大学・教職大学院が連携して進めている取組が先進的な事例となるのではないかと考えている。平成29年度には、今後の公立学校の児童生徒の減少による学校統合などの先行事例となる、小中一貫の義務教育学校の開設も予定している。先進的な教育課題に加え、地域が抱える課題に取り組むことで、附属学校の存在意義を高めていきたいと考える。